

花
曆

はな
ごよみ

昔々有るところにジュエリー職人の息子と、我が道を行くマイペー
スな母の親子が居ました。
此は地球によく似ているけどちょっと違う、何処か余所の世界のお
話。

一章 クリスマスホーリー

クリスマスが近づき世間はお祝いムードに為っている中、僕は一人工房に籠もっていた。

今朝方母上がミサの時に使うロザリオを壊してしまったので、新しいロザリオを作っているのだ。

一体何をどうしたら壊れるのか、それは甚だ疑問だけれど、壊れてしまった物は致し方ない。

ランチティーを楽しんでいる時に修理してぐれと頼まれて急な事だったけれど、僕の工房には沢山の宝石や木、硝子等で出来たビーズが有るので、クリスマスまでには何とかなりそうだ。

母上は何かと注文が多い。
新しいロザリオを作るのに、

「前と同じ木のビーズで良いですか？」

と訊ねたら、

「やー、アーちゃん硝子の綺麗なロザリオがいい。」

と言って聞かず、僕の工房まで来て、ビーズの山の中からレースの様な模様の入ったヴィネツィアンガラスのビーズを、ロザリオを作るのに

必要な数、五十九個選び出して僕に作らせている。

どうでも良いが母上は自分の事を「アーちゃん」と呼ぶ癖がある。

本当の名前はアヴェントゥリーナというのだけれど、名前の発音が面倒臭いと言う理由で小さい頃からアーちゃんと呼ばれていたかららしい。

僕がペンチを持って針金を曲げてロザリオを作っていると、そのアーちゃんからお呼びが掛かった。

「デューク様、お茶の時間でございます」

「ああ、今行くよ。」

メイドの呼ぶ声に、僕はペンチを置いて作業着の埃をはたいた。

僕がティーテーブルのある応接間に行くと、母上以外にも人が居た。

その人は僕より背が高くて、でも同い年くらいの男子。

僕の友人のソンメルソだ。

「やあソンメルソ、来てたんだ」

「そろそろクリスマスだし。」

デュークもどうしてるかと思って来たんだけど、工房に入ってるって聞

いて母君を話してたよ。
新しいロザリオ作ってるんだって？」

「あはは……」

母上が前の壊しちゃって……」

「うん、それも聞いた」

そんな感じで二人で立ち話をしていると、母上がティーカップを片手に手招きを言う。

「二人とも、お話しするのはお茶飲みながらにしない？」

確かにその通りだ。

お茶を飲みながらの話題は、クリスマスのミサの後に行われるパーティーについての事が主になった。

「今年も立食パーティーになるみたいだね」

「今年もか。」

デューク、今年は食べ過ぎて倒れるなよ」

「そうよ、去年あなたが倒れた後アーちゃん大変だったんだから」

え、僕今になって去年の事責められてる？

正直、僕としてはパーティーなんて物は面倒であまり行きたくないと

言うのが本音な訳で。

食事が出るのは良いんだけど、どうもあの社交的な雰囲気馴染めない。

そうすると飲み食いに重点が置かれるように為る訳で。

後、どう言った訳かパーティーに出ると良く女の子に囲まれる事が多々有る。

一回話しかけてきてそれっきりの人も居るけれど、中にはパーティーに来る度に、僕の事を取り巻く人も居る。

本当に、囲まれる理由は解らないのだけれど、どうにもそれも苦手だ。

だからなるべくパーティーでは女の子とは離れて、仲の良い男子陣と話している事が多い。

でも母上はそれが不満らしく、

「デューク、今度のパーティーでは女の子のお友達作るのよ？」

お嫁さんとかの事が不安だわ」

と言われてしまう。

「いやでも母上、パーティーでの女の子の勢いは……怖いです、僕」

お茶を一口飲んで苦笑いすると、ソンメルソも苦笑いを浮かべる。

「確かに、デュークに執心している婦女子の方々の勢いは目を見張る物があるよ」

「あらそうなの？」

「だったら尚更。」

「選り放題じゃない」

「そうじゃないんです母上。」

「そう言う問題じゃないんです。」

「パーティー会場の中をストーリーキングされるのとか本当に怖いんですよ、母上。」

「絢爛豪華にスカートを膨らませたクリノリンスタイルのくせに、的を外さずストーリーキングして来るんですよ。」

「初めは何かの心霊現象かと思ったんですから。」

「そうは思っても口には出せず。」

「結局口から出たのは、」

「えっと……」

「クリスマスに間に合うようにロザリオ作らないといけないんで、僕は工房に戻ります」

「全く関係ない言葉だった。」

工房に戻って、僕は針金を曲げる自分の手を見ながら色々と考えを馳せていた。

職人とは思えない白い手。

あまり鏡は見えない質なのだけれど、鏡を覗き込むと手と同じ様に顔も白い。

世間でご婦人方が夢中になっている“美白”という奴だ。

まあ、普段外に出ないで工房に籠もっている事が多いので、余り日に当たることも無い。

だから白いんだろうとは思うんだけど。

悪い言い方をすれば引き籠もりだ。

「……ふう……」

作業をしていると肩が凝ってくる。

少し溜息混じりの一息を付いて、ようやく輪になったロザリオを広げて見る。

窓の近くで見ると、使われている浅葱色の地に白いレース模様の入ったビーズが透けて見えてとても綺麗だ。

母上、口うるさいけどセンスは良いんだよな。と思ったその日の夕暮

れ。

敬虔^{けいけん}なクリスマス前日。

僕も一応クリスマスチャンと言う事になっているのでミサに出る。

でも、クリスマスのミサは夜から朝にかけて行われているので僕はいつも、どうしても眠くて眠くて仕方がない。

ミサが始まる直前、新しいロザリオを持ってワクワクしている母上の横で、僕は早速ウトウトし始める。

眠くて眠くて仕方がない。

そんな訳で、ミサが始まる頃には、僕はもう夢の世界に行っていた。

「そ……其処右……いや、左じゃない右……」

左は駄目……熊がっ!」

その叫び声で目が覚めた。

ふと周りを見渡すと、ミサはもう終わった様子で、皆さん席を立てている。

……今の叫び声は一体何処から……

周りを見渡ししながら叫び声の元を探していると、隣りに座っている母上が酸っぱい顔をして居る。

「どうしたんですか母上」

「どうしたも何も、ミサで寝てちゃ駄目でしょ。」

寝言まで言うし。

夢の中で熊に追われてたの？」

「えっ！僕寝言言っていました？」

「言ってたわよ。」

『左は駄目……熊がっ！』
って」

え、僕の寝言だったのそれ。

だとしたら結構大きい声で言ってたぞ。

僕は余りの恥ずかしさにショックを受け、その場に居る事がいたたまれなくなって席を立った。

クリスマスパーティーが始まる前、丁度アフタヌーンティーの時間に昨日とは違う友人が訪れてきた。

「メリークリスマス。デューク、調子はどうだい？」

「メリークリスマス。」

お陰様でこの所は調子が良いよ。

メチコボールはどう？」

彼の名前はメチコボール。医者をやっていて、体調を崩しやすい僕のことを何かと気に掛けてくれている。

「私は至って健康だぞ。」

そうそう、クリスマスカードを持って来たんだ。はい、お前の分。

あと母君の分も良かったら。」

「母上の分も？」

じゃあもし良かったらお茶どう？」

「ああ、じゃあお言葉に甘えて」

二人で応接間に行くと、母上が待ちかねたと言った様子で手招きをしてくる。

僕とメチコボールは椅子に腰掛けて、まだ熱いお茶に口を付けた。

夜になってパーティーが始まった。

他の人が皆一様にソワソワしている。

何かと思って話し声を聞いていると、王様が飼っている犬が、このパー

ティーでお披露目されるらしい。

そんな飼っている犬をお披露目何てする物か？とも思うのだけど、やっぱりみんな気になるのだろう。

偉い人の挨拶が終わり、王様の犬が紹介される下りとなると、広間から二階へと続く大きな階段の上に小さなチワワが護衛付きで現れた。

大きく潤んだ瞳、整った毛並み、上品な足取り、大型犬ではないのが意外だけれど、どれを取っても王様のペットと言う貫禄がある。そのお犬様が口を開く。

当然『ワン』とか『キャン』とか言う物だと思っていたら、
「皆の者、今日は良く集まってくれた。苦しゅう無いぞ」

甲高い声でそう言った。

え、ちよつと待って、なんで犬が喋ってるの？

『流石王様の所の御犬様は違いますね、教育が行き届いていらっしやる』とかそんな事を言う次元の話じゃなくて。

僕が頭の中で色々と考えている内にも御犬様は話をしていく。

「……と言う訳で、今日は王からも余に触って良いという許しが出て居る。」

撫でたい者は撫でて構わんぞ」

何か言葉尻がムカツクなあ。

しかし御犬様の言葉に、可愛い動物が大好きな婦女子の方々は大喜び。

我先に御犬様を撫でようと、御犬様に詰め寄っている。

本当の事を言うと、僕も犬とか猫が居たら撫でたい質なので、あの毛並みの良い御犬様は撫でてみたい。

けれど、婦女子の方々に混じる勇氣もないし、なにより御犬様の言動が気に障る。

だから触らなくても……でも触りたい……と、心の中で葛藤を繰り返している。

それでチラチラと御犬様を横目で見ていたら、その視線に気づかれて、また甲高い声で言われる。

「どうした、そなたも触りたいのか？」

触っても構わんぞ。

はれどうした」

やっぱり言動がムカツク。絶対触らない。
そう思い、

「いえ、大丈夫です」

と断るが、『気持ち良い』『手触りが良い』と言う感想を聞いてしま
うとどうしても気になる。

それでまたチラチラ見ていると、御犬様が小馬鹿にしたような顔つ
きでこう言った。

「どうしたそのような目で見て。

余はオスだぞ？

そなたはホモか？」

何て事言うんだこのクソチワワ！

「断じて間違っても絶対にそんな事は無いのでお気になさらないで下
さい」

ぶん殴りたい気持ちを無理矢理抑えて、チワワに一言断りを入れ
た後、二度と気にしない様にサンドイッチの並んだテーブルへと向かっ
た。

今日の花は「クリスマスホーリー」

花言葉は「清廉」

その花言葉通り、『犬に触りたい』と言う私欲に負けては為らない。と

思
っ
た
日
だ
っ
た
。

第二章 福寿草

クリスマスも終わり、僕はまた工房に籠もる生活が続いている。何故かという、毎年一月一日には必ず、路上でジュエリーを売りに行っている、その為だ。

普段割とお偉方のジュエリーの受注を受けて作っているのだけれど、それだけだともうにも自分の評価という物が解りづらい。なので、一般的に見て僕の作品というのはどんな物なのか、それを知る為に路上販売をやっている。

時計を見ながら作業をし、気が付けばもうティータイム。余り根を詰めすぎても調子を崩すので、一息入れようと応接間に向かった。

応接間に行くと母上と友人二人が居た。

「今日は呼ぶ前に来たのね。」

お友達も来てるわよ」

「はい、見れば解ります」

しかしこの状況は困った。

何故困るのかというと、実はソンメルソとメチコボールは仲が余りよろしくない。

しかも母上はその事を知らないのだ。

母上を挟んで座る二人。

二人の間に見えない火花が散る。

「とりあえず立ってないで座りなよ。

隣り開いてるぞ」

とメチコボールが言うのと、ソンメルソも笑顔で言う。

「そうそう、座ると良い。隣り開いてるぞ」

でも僕は見逃せなかった。

ソンメルソが一瞬凄顔でメチコボールを睨んだのを。

迂闊な場所に座ると後々怖い気がしたので、とりあえず僕はどちらとも付かない、間を取った席に座った。

席に着くとメイドがお茶を注いでくれる。

そのお茶の香りを嗅ぐと、紅茶にしてはスモーキーな香りがするので、母上に尋ねた。

「母上、このお茶は何ですか？」

「ラプサンスーチョンよ。」

ちよつと前にソンメルソ君が持ってきてくれたの」
「へー、そうなんだ。」

ソンメルソ、ありがとう」

そう言つてからお茶を口に含むと、やっぱり強い薫製のような香りと、若干の渋みが口に広がる。

こう言いタイプのお茶には、甘い御菓子よりもサーモンとかチーズの方が良く合いそうだ。

小腹も空いているしお茶請けを食べようと思ひ、お茶請けのお皿を見ると、其処にあるのは小さなピックと縁が茶色く中が黄色い、しんなりした何か。

「……此は何？」

ピックで一切れ刺して、目の前にそれを持ってくる。

「ああ、それはメチコバール君が持ってきてくれたの。」

『イブリガッコ』って言うんだって」

イブリガッコと言われても何だか解らない。

持ってきた本人であるメチコバールに視線で問いかけると、

「イブリガッコというのは東洋の島国で局地的に作られている、大根の漬け物の薫製だよ。」

この手の味はデュークとかが好きそうだと思ってね」
と返って来た。

「だけどいまいちピンと来ない。」

「漬け物？ピクルスを薫製にした感じ？」

「ピクルスとはちよつと違うかな。」

「まあ食べてみてくれ」

「まだいまいちこの物体の事がよく解らないのだが、主成分が大根なら食べても平気だろう。」

「そう思つて一口食べてみると、甘い様なしよっぱい様なそんな不思議な味と、香ばしい香りが口の中に広がった。」

「うん、このお茶に合うね」

「僕は一口でそのイブリガッコと呼ばれる物体を気に入り、自分のお皿に乗っている分を、あつという間に平らげる。」

「その様子を見ていたソンメルソが、自分の分のお茶請けを僕に差し出してこう言った。」

「その漬け物、そんなに気に入ったんなら俺の分要る？」

「良く見るとその皿は全くと云つていい程手つかずだ。」

「良いの？美味しいのに」

僕がお皿を受け取りながら訊ねると、苦笑いを浮かべる。

「いや、この漬け物、俺の口にはちよつと合わなくて」

確かに、言われてみれば好みの別れそうな味をしてはいる。

口に合わない物を無理に食べると言うのも何なので、僕は有り難く、貰った分のイブリガッコを食べた。

僕とソンメルソが話してる間、メチコボールが凄く渋い顔してたけど、余り気にしないようにしよう……

ああ、なんか居づらいなあ。

ティータイムが終わって工房に戻ると、僕はまた作業に入る。

やっぱり、工房に居ると落ち着く。

一人で居られて気楽と言うのも有るのだけれど、綺麗に片づいた応接間とかよりも、雑多な感じのする此処の方が、なんか居心地が良い。それに、作業をしていて少しずつ、自分の手の中で作品が出来上がっていくのが楽しい。

作業を始めてどれくらい経っただろうか、暫くすると工房のドアをノックして誰かが入ってきた。

「お疲れ。はかどってるかい？」

そう言われて振り返ると、ティーカップを持ったソンメルソが立っていた。

「ああ、それなりにそれなりに。」

ソンメルソは家に帰らなくて大丈夫？」

「デュークにお茶を差し入れしてから帰ろうと思ってね。」

アフタヌーンティーのすぐ後にお茶を出すのも何だと思って、少し時間置いてたんだ」

そう言つて、彼は作業台の開いている所にティーカップを置いてくれる。

ソンメルソは良く僕にお茶を淹れては持つて来てくれている。

茶葉自体を家につけてきてくれる事も間々有るのだけれど、いつもは僕が作業中の時とか、病気で倒れたりした時とかにお茶を淹れて来てくれるのだ。

本人曰く、『紅茶を淹れるのは趣味だから』なのだそう。

それにしてもいつも淹れて貰っているの、有り難く思つてるのだけれど、なかなかそれを口に出せない。

「それじゃ、作業の邪魔になる前に戻るよ」

結局今回も口に出す前に、彼は何処かへ行ってしまった。

一息ついて紅茶を飲むと、アフタヌーンティーの時のお茶とは打って変わって、フルーティーな香りが鼻をつく。

爽やかな渋みのあるそのお茶は、ソンメルソお得意のダージリンだ。

お茶を飲んで気分をすっきりさせた後、僕はまた細かい作業に戻るのだった。

そして来る一月一日。

僕は朝から荷物を纏めたり、お弁当を作って貰ったりして、露店の準備をする。

目が覚めて、アーリーモーニングティーを飲んでから、朝食が準備されるまでの間に荷物は何とかしてしまいたい。

そんなにごっそりと持って行く訳ではないのだけれど、何にせよジュエリーは素材が石とか金属とかの重い物が多いので、数はそんなに無くても重量は結構行っちゃったりする。

荷物を詰め終わり朝食を食べていると、母上がこう言った。

「今年も露店やるんでしょ？」

「風邪ひかない格好で行きなさいよ」

「大丈夫ですよ。」

ちゃんと着込んで行きますから」

「そう言つて去年も風邪ひいたじゃない。

メチコパール君が看てくれたから良いけど、アーちゃん心配したんだから」

「……すいません……」

この冷える時期、一日中外に居るといふのは結構大変な訳で。

ちゃんと着込んで行っているつもりでも、帰ってくる頃には体の芯まで冷え切ってしまう。

まあ、一日中とは言つても、夕食時には帰ってくるのだけけれど。

今日のことを心配しているのか酸っぱい顔をしている母上に、他の話題を振る。

「所で母上、化粧品を借りたいんですが」

「え、またアーちゃんの使うの？」

貴方結構頻繁に使うんだから自分で買いなさいよ」

「そうだけど……」

ちよつと化粧品買うのには抵抗が……」

この話題に母上は益々顔を酸っぱくする。

でもまあ、それもいつもの事なので、母上に化粧品を貸して貰えるこ

とになった。

朝食が終わり、部屋に戻って出掛ける為の身支度を始める。

そのままコートを羽織って出ていけば楽なのだろうけど、ちょっと今日はと言う訳にもいかない。

始めて露店を出した時に適当な格好で店番をしていたら、僕の顔と顧客を知っている人が来た事が有るのだけど、その時に作品ではなく僕の名前だけでジュエリーが売れてしまったと言う事が有り、少々嫌な思いをしたので、それ以来変装して露店を出すようにしている。

それだと皆作品を見て、気に入った物だけを買ってってくれるので大分心持ちが違う。

何かこう、売れるのと評価されるのがイコールのような、そんな心持ち。

それで今、変装する為に女物の服に袖を通して化粧をしている訳なのだけだ。

なんでよりにも寄って女装なんだろうと考えた事はあるけれど、眼鏡を掛けるとか帽子を被るとか、そんな生半可な変装では知り合いにばれそうな気がして。

いや、女装は女装で知り合いにばれたら自分の人生に致命傷を負いそうだけど。

まあ、これで今の所はばれていないので良いとしている。

顔におしろいをはたき、唇に紅を引く。それから長髪のウィッグを被ればこれでもう別人だ。

鏡を覗き込んで不自然がないかどうかを確認。

それからコートを羽織り、ショールを被れば出掛ける準備はOKだ。僕は重い荷物を持って、家の裏口からこっそりと出ていった。

大通りに出ると既に人が行き交っている。

そんな中、道の片隅に台を作り、布を敷いて露店の準備を始める。

この作業ももういい加減慣れた物。
いつもこの場所に露店を出すので、近所のお店の人も結構顔馴染みになっている。

露店を出し大通りを見て居ると、時間と共に人通りが多くなっている。

偶に近所の人に挨拶されたり何かして、時間は過ぎていく。
品物が売れなくても、人通りを見ているだけでも割と楽しい。

この沢山の人達の中にも色々な人が居て、皆それぞれ色々な事を抱えて居るんだらうなと思う。

こういう所で品物を並べていると、貧富を問わず色々な人が見ていくつくれる。

年齢だつて色々だ。

そんな中、一人の女の子が目についた。

その子は薄汚れた服を着ては居たけれど、とても綺麗な目をしていて、物珍しそうに僕の作ったジュエリーを眺めている。

その内の一つ、小さなエメラルドのあしらわれたネックレスを手に取り、ちっと見つめていた。

「それが欲しいの？」

僕がそう訊ねるとふるふると首を横に振ったけれど、顔はとても欲しそうだ。

僕は少し周りを見渡して、誰も見ていないのを確認してその女の子に言った。

「それはあげる。

でも、他の人には内緒だよ」

すると女の子はとても嬉しそうな顔をして頷き、

「ありがとう！」
と一言だけ残して人混みに紛れていった。

今日の花は「福寿草」

花言葉は「永遠の幸せ」
その花言葉通り、ちよつとした幸せを見つけられた。と思った日だった。

第三章 木瓜^{ぼけ}

外ではまだ寒い風が吹きすさぶ中、僕は相変わらず工房に籠もっていた。

工房では金属の鑢^{ろうづ}付けをするのに結構火を使ったりするので、作業台の周りだけはそこそこ暖かい。

今作っているのはお得意先から頼まれた、宝石付きのブローチ。

枠は出来上がっているの、後は石を填めるだけ。

僕は小さな枠に六個の石を順番に填めていく。

メッセージ性の強いジュエリーなので、石の順番を間違えうわけにも行かないので慎重にやる。

一個目はルビー。

二個目はエメラルド。

三個目はガーネット。

四個目はアメシスト。

五個目はまたルビー。

六個目はダイヤモンド。

この順番に宝石の頭文字を取ると、『敬意』と言った意味合いの言葉が

浮かび上がってくる。

最近是这样言った、メッセージを込めたジュエリーが流行っている。

宝石の頭文字を取ってメッセージにする以外にも、花言葉を添える意味で花のモチーフや、手などのシンボリックなモチーフも多い。

でも、こう言う物も僕と縁があると言えば作る時くらいのも物で。個人的には送ったりする相手も居ないので、作り手でなかったら昨今の流行なんて知る由も無かったんだろうなと思う。

そうこうしている内に、朝から工房に籠もっている僕をメイドが呼びに来た。

そろそろランチティーの時間のような。

僕はその場でのびをして、作業着の埃をはたいてから工房を出た。

ランチティーの時間は殆ど僕と母上の二人だけで過ごす。

だから、母上が何か作って欲しいと言ってくるのはこの時間が多い。

そう言えばこの間のロザリオの修理も、この時間に言われた気がする。そんな訳で、ランチティーを戴く時は何を言われる物かと思って、割とハラハラしている。

そんな僕の気持ちを余所に、母上は至って普通に話しかけてくる。

「そう言えば貴方、今作ってるジュエリーって注文の品だけ？」

「そうですよ。それが何か？」

「それって納期いつ頃？」

「今月中旬です。それが何か？」

嫌な予感がする。

母上がこうやって仕事の予定を聞いてくるときは、大体何か注文を付ける時だ。

思わず身を引くと案の定、

「じゃあそれが出来上がったら髪飾り作って。

アーちゃん髪飾り欲しいの」

と来た物だ。

「まあ、仕事に差し支えない程度に作ります……」

僕は溜息をついて、紅茶を一口飲んだ。

それから暫く、注文の品が依頼主の手に渡った後、僕は母上にどんな髪飾りが欲しいのか尋ねた。

「母上、髪飾りが欲しいってどんなのが欲しいんですか？」

またロザリオの時みたいにヴェネツィアンガラスが良いですか？」

すると母上は布の束を広げて言う。

「今度はガラスじゃなくてね、この布をアクリル版で挟んでかんざし簪かんざしにして欲しいの」

「アクリル版って超高級品じゃないですか！」

近頃石油からプラスチックやアクリルなど、色々な物が作られるようになったが、どれも此も高級で、そうそう手が出るような物ではない。

それを母上は欲しいと言っているのだ。

「だって、最近流行ってるのよ？アクリル版に布を挟んだアクセサリー。現品を買いと高いから、アーちゃんアクリル版と布、別々に買ってたの」

……もう買ってきてるんだ……

此はもう作るしかない。そう思って間に挟む為にあるのであろう布を、一枚ずつ捲ってみる。

良く見てみると、布も何やら余り見かけない柄の物。抽象的な花の模様や、幾何学模様が描かれている。

「母上、この布は何処で買ってきたんですか？」

余り見かけない柄なんですけど」

「輸入品を扱ってるお店で買ってきたの。」

なんでも東洋の島国、ジャポンって言うところの布らしいわよ。

最近そのジャポン風の布も流行っててね。

欲しかったの」

「へー、そうなんですか、こんな布初めて見ました」

そのジャポン風の布は、割と僕の好みにも合う感じ。

初めは余り気乗りしなかったけれど、こんな布が使えると思うと、ちよつとやる気が出てきた。

早速作業に取り掛かったその日のアフタヌーンティーの時間、いつもの様にソンメルソが訪ねてきた。

「やあ、今度はアクリル版で母君の髪飾りを作るんだって？」

アクリル版なんて良く手に入ったね。

高かっただろ？」

「いや、アクリル版を買ってきたのは僕じゃなくて母上だから……」

「え？母君が？」

何処で買われたんですか？」

母上がアクリル版を買ってきたと知ったソンメルソが驚いて母上に

尋ねると、母上は事も無げに答える。

「デュークのお父様にねだって買って貰ったのよ」

へー、そうだったんだ。

所で母上、僕は今まで一度も父上に会った事ありません。

何故そんな事になっているかと言うと、夫婦の仲が悪くて別居しているという訳ではなく、母上は父上の妾で、父上は正妻と一緒に住んでいるのだそうだ。

母上は時々父上と会っている様子だけれども、僕はタイミングが悪いのか物心付いてからと言う物父上に会った記憶がない。

ただ話に聞くだけだ。

ああ、よく考えると複雑な人間関係かも知れない。

複雑な人間関係には余り足を踏み入れたくないから考えるのをやめよう。

家族関係の事を頭から振り払うように、僕はお茶請けのスコーンを嚙った。

アフタヌーンティーが終わって、ソンメルソがアクリル版を加工している所を見たいというので、一緒に工房に入った。

ソンメルソは毎日のようにお茶を持ってきてくれている。なので有る程度工房の勝手が分かっていて、余り色々と注意をしなくて良いので助かる。

「此がアクリル版。」

此の間に布を挟んで、溶剤を使ってくつつけるんだよ」

「へへ、アクリル版は初めて見た。」

硝子みたいだけどう違うんだ？」

僕がアクリル版を見せると、ソンメルソが興味深そうにアクリル版を見つめる。

「硝子との違いかあ。」

まずは根本的に原料が違うかな。

ガラスの原料は珪砂^{けいさ}だけど、アクリル版の原料は石油なんだ。後は重さも違うし、アクリルの方が傷が付きやすいなあ。

そんな感じ？」

「石油製品か、なるほど。」

それでアクリル版は高いんだな。

今まで硝子との違いが解らなくてね。
なんで高いのか解らなかったんだよ」

鍔がけしてたら手が疲れたよ」
手に着いたアクリルの粉末を落としてから、熱い紅茶を一口飲んだ。

それから暫く。

アクリルの簪が出来上がり母上に渡すと、
「あら、良いじゃない。ありがとね」

との事。

気に入ってくれたようで良かった。

これでリメイクとか来たらもう大変な訳で。

ほんと一安心していると、母上が今度は掌ほどの大きさをした瓶を出して来た。
中にはどろっとした液体が入っている。

「はいこれ」

「はいこれって何ですか此は」

嫌な予感がする。

「今度は漆塗りの簪が欲しいな。
一本刺しで良いから作って」

やっぱりそんな事だろうと思った。

と言う事はだ、この瓶の中身は漆だ。

しかしそんな物を渡されても、漆細工は僕の守備範囲外な訳で。

「母上、漆塗りは自信がないです……」

「えー、アーちゃん漆買って来ちゃったじゃない」

「だから何処で買って来るんですかそんな物。」

漆細工が欲しかったらジャポンからの輸入品を扱ってるお店で買って下さい」

僕の言葉に母上は酸っぱい顔をするが、構わずに畳みかける。

「大体漆って乾くのに凄く時間が掛かるんですよ。肌に付くとかぶれるし。」

仕事の方に支障が出たらどうするんですか」

そこまで言うとも母上も諦めがついたのか、溜息をついて言った。

「時間掛かるのか、じゃあいいや。」

お父様にねだって漆の簪買って貰うわ」

「初めからそうして下さい」

そんな訳で、僕は何とか漆塗りを回避したのだった。

ところがある日の事、いつも僕にジュエリーの制作を注文して下さるお客様がこんな事を言った。

「実はね、漆塗りの髪飾りが欲しいという人が居てね、君に頼みたいんだよ」

「はあ……漆ですか」

漆って先日母上の依頼蹴ったばかりだよとか思いながらも、お得意様なので無碍に断る訳にもいかない。

全く漆の扱いが解らないのなら断りようも有るのだろうが、前に何度か扱った事が有るからなあ……

「漆細工は時間が掛かると聞いているからね、焦らないで作ってくれて構わないよ」

「はい、わかりました」

急かされなくて良かった。

こうやってのんびり待っていてくれると、こちらとしては非常に助かる。

時々『死ね』と言わんばかりに無理な納期で注文してくる人が居るからなあ。

そう言う人には色々と説明をして、適正な納期に延ばして貰う事が

偶にあるのだが、この人は割といつも余裕を持って注文してきてくれるので助かっている。

そんなやり取りの後、大体どんな物を作って欲しいのか細かい注文を聞いて仕事を正式に受ける。

聞いた感じだとそんなに複雑な形にはしなくて良いみたいなので、木の削り出しはそんなに苦勞しないで済みそうだ。

そして翌日。早速作業に取り掛かった。

まずは角材を薄くスライスし、更にそれを細長く切る。

この作業がなかなかの曲者で、なかなか上手くいかない。

一々二時間に及ぶ悪戦苦闘の末、一本の細い棒を切り出した。

しかしその棒の、その形のままでは簪に出来ないので、先細りになるように鉋^{かん}がけをする。

太くしたい方を固定し、鉋を当てて一気に引く。

それを全体のバランスを見ながら繰り返し、出来上がったのは細長い四角柱。

根気が居るのはこれからで、この棒をなめらかになるまで、鑢^{やすり}がけしなくては為らない。

そんな感じでずっと作業に没頭し、気が付いたらランチティーもアフタヌーンティーも過ぎて夕食の時間。

とりあえず、夕食を食べて一息つこうと思った。

作業を始めて数日、何度か漆を塗った簪は、だんだんそれっぽい物になってきた。

漆を使うのも久しぶりなので何とか一安心と言ったところだ。

ふと、気がゆるんだのか僕の手から漆刷毛が落ちて、反対側の手首の内側にべったりと漆が付いてしまった。

「ぎゃっ！落とさないと……」

これには思わず声を上げる。

こんな所に付いたら絶対かぶれると言う所に付いた漆を油でふき取る。

ああ、きつと酷くかぶれるんだろうな……

そう思いながら、今日塗った漆を乾かす為に、簪を乾燥棚に置いた。

時計を見ると丁度お茶の時間。今日の作業はこの辺で終わりにしてお茶でも飲もう。

作業着から着替えて応接間に行くと、今日はメチコボールが来ていた。

「あ、メチコボール。丁度良い所に来てるね」

「丁度良い所って、何かあったのか？」

彼は一瞬眉を顰^{ひそ}める。

その様子に僕は一瞬ビクついたが、用件を軽く説明する。

「実は今、漆塗りの依頼を受けててさ、漆を塗ってるんだけど、ちょっと漆を手首にべったり塗っちゃったんだよ。」

かぶれに効く薬とか無いかな？」

それを聞いたメチコボールが、今度は溜息をついた。

「漆を塗ったのか。」

漆に付ける薬はないぞ。

まだかぶれてないんだったら、日に当たらない様にする位だな」

「え、薬無いの？」

「漆職人だったらそれくらい常識だろう」

「いや、僕漆職人じゃないから」

よく解らない事を言われた気がするけど、そうか、日に当てなければいいのか。

そう思って安心していると、とどめの一言。
「まあ、手首だったら確実にかぶれるな」
そんな事言わないでくれよ。

今日の花は「木瓜^{ぼけ}」

花言葉は「平凡」
その花言葉通り、多少ごたごたは有る物の、割と平凡な日が続いた気がする。